

# 史蹟指導標の碑文にみる新編鎌倉志の影響について

岸本 洋一

## はじめに 一問題の所在一

本稿の目的は、鎌倉の史跡に建つ 80 基におよぶ石碑群「史蹟指導標」<sup>1</sup>（以下、指導標と表記）（図 1）に刻まれた碑文の内容について、近世の地誌『新編鎌倉志』<sup>2</sup>の影響を数値的に実証することにより、指導標が造立された史蹟<sup>3</sup>が選ばれた理由を検証するとともに、近代の鎌倉住民たちが自らの歴史をどのように再評価したのかを明らかにすることを試みるものである。

指導標とは、鎌倉の史蹟について詳しく解説した碑文が刻まれた石碑のことで、主に大正から昭和戦前期にかけて鎌倉町青年会、鎌倉町青年団といった地元の青年団体により造立された鎌倉の史蹟顕彰碑<sup>4</sup>である。そして、この指導標については、これまでその歴史的意味において十分な分析・考察が行われてこなかった。

筆者は、この指導標を研究対象として取り上げ、その歴史資料としての評価を進めるとともに、指導標を通して近代鎌倉の歴史顕彰活動について明らかにする研究に取り組んでいる。具体的には、以前、鎌倉町青年団の副団長としてこれらの建碑に携わった小坂藤若<sup>5</sup>という人物に焦点を当て、指導標が造立された経緯や建碑の目的について明らかにした<sup>6</sup>。

そこで、本稿では、指導標に刻まれた碑文の内容を整理し、指導標の歴史資料としての評価を進める。ここで碑文分析を進めるにあたり、先行研究より鎌倉の名所形成に大きな影響を与えたとされる近世初期に編纂された鎌倉の地誌『新編鎌倉志』<sup>7</sup>（以下、新編鎌倉志と表記）と指導標との関係性に着目する。近代に造立された指導標が、近世の地誌である新編鎌倉志の影響を受けている可能性はすでに自明とも言えるが、その点も踏まえ改めて検証し、両者の関係性をより具体的に呈示したい。

## 第 1 章 研究史の整理と本研究の方法

### 第 1 節 研究史の概観と課題

指導標を取り上げた先行研究について整理する。本稿で論じる碑文分析の観点から指導標を取り上げた主要な文献としては、稲葉一彦<sup>8</sup>の作業がある。

稲葉は、指導標を対象として発行時点での所在地と碑文の写しを掲載し、碑文の内容について解説を加えており、現状で最も指導標について整理された資料となっている。基本的には指導標の紹介を目的としているが、碑文を資料化している点は評価できる。

なお、この稲葉以外に指導標そのものを取り上げて、その資料的評価を検討した論考を見出すことはできない。したがって、指導標は、未だ十分に研究がなされていない状況といえる。

つぎに、関幸彦<sup>9</sup>は、指導標の造立地選定について新編鎌倉志との関連性に言及している。関は、鎌倉町青年会が指導標「問注所舊蹟」を「裁許橋」にほど近い場所に造立したが、これは「裁許の名は門注（裁判）との連想から裁許橋の近辺が、問注所の旧蹟とされるにいたった。」と述べている。また、新編鎌倉志のもととなった『鎌倉日記』<sup>10</sup>に「裁許橋」の名があり、「これが『新編鎌倉志』と受け継がれ、堅固な観念として定着していったようだ」と述べる。この関の見立てが正しければ、指導標「問注所舊蹟」は、新編鎌倉志の影響を受けて造立地点が決定したこととなる。因みに、指導標と新編鎌倉志を結びつけた文献は、管見の限りこの関の文献のみである。

### 第 2 節 先行研究にみる指導標と新編鎌倉志を対照する意義

近世寺社参詣史の立場から新編鎌倉志に掲載された鎌倉名所の固定化について論じる原淳一郎<sup>11</sup>は、新編鎌倉志「畠山重保石塔」を名所固定化の一例として取り上げている。新編鎌倉志では、この「畠山重保石塔」について、重保の父重忠の石塔で重忠の屋敷があったとの里俗があるが、これは間違いであると否定しているが、この記述について原は、新編鎌倉志に掲載された後、地元の伝承の重忠ではなく「畠山重保石塔」として定着したとして、新編鎌倉志の影響を指摘する。

実は、この「畠山重保石塔」と呼ばれる宝篋印塔の隣に、鎌倉町青年団も「畠山重保邸趾」という指導標を造立している。原はとくにこの指導標については言及していないが、新編鎌倉志の影響が示唆される名所に指導標が造立されたという事実から、新編鎌倉志の影響を受けて指導標が建碑された可能性は否定できない。すなわち、「畠山重保邸趾」と「畠山重保石塔」からは、指導標と新編鎌倉志の間にある程度関係性が垣間見える。

しかし、この事例は、全 80 基中の一事例を取り上げたに過ぎない。指導標の史蹟選定や碑文の内容

に対する新編鎌倉志の影響を具体的に捉えるためには、80基すべてについて両者の記述内容を対照する作業が必要となる。そこで本稿では、指導標の碑文分析として新編鎌倉志との対照作業を行う。次節では、具体的な分析方法について説明していきたい。

### 第3節 本研究の方法

先行研究を踏まえ、本稿で行う研究方法について説明する。まず、本稿の碑文分析で取り扱う指導標の碑文については、2018年に筆者が行った指導標の悉皆調査により得られたデータを基礎とする。調査の結果、2018年時点において80基すべての指導標が散逸することなく、現鎌倉市域内に現存することを確認した<sup>12</sup>。とくに本稿で取り組む碑文については、碑文面の保存状態は極めて良好であり、この調査によって全基の文字を読み取ることができた。

本稿で使用する指導標の碑文は、本調査における結果を基礎資料として用いる。なお、指導標の碑文の末尾には必ず造立年と建碑団体の記載がある。これにより年代別の造立数、造立年代と建碑団体の関係をとらえることができる。これら建碑団体の詳細と建碑の経緯については、すでに拙稿<sup>13</sup>において整理しているが、あらためて造立年代順にまとめ、(表1)に示した。このように全80基すべてにおいて、造立年と建碑団体が碑文から確定できることは、指導標の意義を捉えるうえで碑文自体が重要な資料性を有していることを改めて示しているといえる。

つぎに、悉皆調査により確定した碑文の分析方法について説明する。本研究は、冒頭に記したように、指導標における新編鎌倉志の影響を具体的に実証することを目的としている。そこで本稿では、指導標全基の碑文分析を行うとともに、碑文の文章と新編鎌倉志の記述(言い回し)を対照する作業を進め、両者の関係性を具体的な指標により呈示する。

ここで、石碑の上部に刻まれている題額についても、碑文分析の対象と捉え分析を進めることとした(図1)。その際、その性格の違いから題額と碑文は、個々に対照作業を進める。題額は、指導標が対象とする史蹟自体を示す対象であるのに対し、碑文は、対象とする史蹟を説明するために刻まれているという両者の性格の違いを踏まえている。

対照方法は、題額・碑文ともに、新編鎌倉志との一致度をランク分けのうえで評価し、一致度の高い指導標と低い指導標の意味の違いを考える。とくにある程度の長さの文章である碑文については、計量文献学を参考に<sup>14</sup>、一致する文章の長さを数値的な指標を用いて捉える方法を取り入れ、より具体的に

実証する作業を試みたい。そのうえで、つぎに、時間軸の要素を取り入れ、指導標造立前・中・後期ごとの新編鎌倉志との関係性を捉え、建碑者の造立意図の変化や鎌倉の歴史の再評価への新編鎌倉志の影響について分析を行うこととする。

## 第2章 指導標の碑文分析

### 第1節 指導標の題額と新編鎌倉志の対照分析

指導標の題額について、新編鎌倉志の取り上げている名所の見出しと一致するかどうかを検証し、その一致度を5段階で評価したうえで(表1)に示し、集計結果を(図2)にまとめた。なお、新編鎌倉志の掲載文については、指導標と同時代史料との対照という意味から、大正期に刊行された『大日本地誌大系』(大日本地誌大系刊行会)<sup>15</sup>を用いた。(※分析方法の詳細は(表2)を参照)

因みに、新編鎌倉志は、巻之一から巻之八まで、鶴岡八幡宮を中心に鎌倉の町を反時計回りにハブロックに分け、その地域の名所(神社・仏閣・古蹟など)ごとに見出しを掲げ、その下に解説を記す形式を取っている。すなわち、この見出しが、指導標の上部に記された題額に相当する存在と言える。したがって、まず、題額と見出しという性格を同じくする対象同士で、対照作業を行った。

これより(表1)における評価(◎○●△×)の記号に沿って、各段階の対照結果、および、評価方法を説明していきたい。◎は、題額と見出しが完全に一致した場合である。「荏柄天神」、「筋替橋」など21基が該当する。因みに、「朝夷奈切通」と「朝夷名切通」は、漢字の当て字は一部異なるが、読みが同一であるので◎で評価した。

○は、題額と見出しの内容は一致するものの、表記が完全には一致しなかった事例である。「偏界一覽亭舊跡」と「偏界一覽亭跡」は、舊跡と跡で表記も読みも異なるため○で評価した。以上の2段階が、題額と見出しが一致と評価した指導標で、その集計結果は、◎21基と○29基、合わせて50基となり、この段階で、指導標全80基中62.5%と半数を超えた。

つぎに、指導標の題額と一致した見出しはないが、新編鎌倉志の文中に題額の記載が認められる事例を●で評価した。例えば、指導標「關取場跡」は、新編鎌倉志巻之二「荏柄天神」の本文に「門前に、關取場と云所あり。」と記載されているため、●とした。結果、●は18基となり、先の◎○と合わせ、68基の指導標の題額が新編鎌倉志の見出しや本文の記載内容と一致したこととなる。

題額と一致した見出しはないが、新編鎌倉志の本

文中に題額の内容の一部が記載されている事例を△と評価した。「俊基朝臣墓所」は、新編鎌倉志卷之四「葛原岡」の本文に俊基処刑の地の記述はあるものの、墓所の記述は認められないため、△とした。結果△は6基となり、先の◎○●と合わせて指導標74基(92.5%)の題額が新編鎌倉志にも何らかの記載の認められる結果となった。

最後に、指導標の題額が新編鎌倉志に一切記載がない×の評価、すなわち、新編鎌倉志との関係性が全くみられない事例は、80基中6基のみであった。

## 第2節 指導標碑文と新編鎌倉志の対照分析

2つ目の分析として、指導標の碑文と新編鎌倉志の掲載文との一致度をみるために、文末の造立年と団体名を除き、碑文を構成するすべての文字について、新編鎌倉志の記述との一致の有無を確認した。そのうえで、一致する文字と、不一致の文字各々について文字数を集計し、一致する文字数について、総文字数に占める割合をパーセンテージで算出、一致度の数値化を行い、その割合を新編鎌倉志との一致度として評価し(表1)に表示した。

具体的に、指導標「北條執權邸舊蹟」(史料1)を例に、(表2)に示した対照の評価手順に沿って説明していきたい。なお、文末の造立年代と造立団体名「大正七年三月建之 鎌倉町青年會」は対照する対象から除外し、「往時此ノ地ニ」以下「改メシモノナリ」まで、170文字について、新編鎌倉志に記載が有るか無いかを評価する。

最初に、指導標の対象とする史蹟と同じ対象を示す新編鎌倉志の見出しを確認する。題額「北條執權邸舊蹟」が対象とする見出しは、卷之七に収録の「寶戒寺 附北條屋敷、頼經以後代々將軍屋敷、屏風山、小富士、土佐坊屋敷跡」<sup>16</sup>(以下、「寶戒寺 附北條屋敷」と表記)である。この見出しの本文と、碑文を対照する。冒頭の「往時此ノ地ニ北條氏ノ小町亭在リ」(15文字)は、「寶戒寺 附北條屋敷」に「江間義時、大倉亭とあり。或は義時の亭、小町の上とあり。共に此地の事なり。此所、小町の上にて大倉の内なり。」とあり、すべて記載有と評価する。

「義時以後累代ノ執權概ネ皆之ニ住セリ」(17文字)は、「時政は、後に名越の亭に居せられたり。其後代々の執權、相模入道に至るまで、爰に居す。」との記述があり、言い回しは異なるものの内容は一致しているため、すべて記載有と評価する。指導標の碑文は漢文の読み下し形式の文体であるが、文献を引用する場合も直接のテキストの引用は非常に少なく、その多くがこのような意識の形を取っている。

したがって、本稿では言葉・言い回しが一致する文字だけでなく、意味・内容が一致する文字も含めて記載有と評価している。

「彼ノ相模入道ガ朝暮ニ宴筵ヲ張り時ニ田樂法師ニ對シ列坐ノ宗族巨室ト俱ニ直垂大口ヲ爭ヒ解キテ纏頭ノ山ヲ築ケリト言フモ此ノ亭ナリ」(61文字)は、冒頭の「相模入道」という表現のみが「寶戒寺 附北條屋敷」に「相模入道崇鑑平高時」と認められるものの、中心の田樂云々の記載は一切みられないため、4文字記載有、57文字記載無と評価した。

「元弘三年」は、「寶戒寺 附北條屋敷」には記述がみられないが、同じく卷之七収録の「葛西谷 附東勝寺舊蹟」<sup>17</sup>に記述があるため、4文字を記載有とした。このように、直接対象する見出しに記載がなくとも、新編鎌倉志全八巻のどこかに記載が認められれば、記載有に記録している。「新田義貞亂入ノ際灰燼ニ歸ス」(13文字)は、「灰燼ニ歸ス」5文字のみが、「寶戒寺 附北條屋敷」の「灰燼と成とある」と一致するため、記載有に記録した。

最後に「今ノ寶戒寺ハ建武二年足利尊氏ガ高時一族ノ怨魂弔祭ノ爲北條氏ノ菩提寺東勝寺ヲ此ノ亭ノ故址ニ再興シ以テ其ノ號ヲ改メシモノナリ」(47文字)と寶戒寺開山由来の記述があるが、「寶戒寺 附北條屋敷」に「此地は相模入道崇鑑平高時が舊宅なり。故に源尊氏、後醍醐天皇へ奏して、高時が爲に葛西谷の東勝寺を遷して、北条の一族の骸骨を改め葬り。此寺を建立せり。」との記述がある。指導標の碑文にある年号「建武二年」と高時以外の「一族ノ怨魂弔祭」の記述(11文字)が新編鎌倉志に記述がないものの、足利尊氏が北条高時のために寶戒寺を東勝寺の再興によって建立したとの内容は双方一致と認められるので、その箇所49文字を記載有と評価した。

結果、記載有94文字、記載無76文字となり、総文字数170文字に占める記載有文字数は55.3%と算出された。この数値を、本稿における指導標「北條執權邸舊蹟」の新編鎌倉志との一致度の評価値とする。

このような方法で、指導標全基の碑文について、便宜上センテンスごとに新編鎌倉志記載の有無を調査し、最終的に指導標全基の文字数を記載有と記載無に分類、総文字数に占める記載文字数の割合という指標で1基ごとに一致度を数値化し評価した。

その一致度を便宜上5段階に分類し図示したものが(図3)である。A(75.1~100%)が22基(27%)、B(50.1~75%)が15基(19%)、C(25.1~50%)が21基(26%)、D(0.1~25%)が18基(23%)、E(0%)が4基(5%)という結果となった。一部への偏りが見られず、概

ね各段階に均等化されている。中間の 50%で区切ってみても、50%を超える A と B の合計が 37 基で 46%、C と D の合計が 39 基で 49%とほぼ同数の比率となる。

因みに、前節において指導標の題額の一致度が×となった 6 基については、そのなかの 4 基が碑文にも内容の記載はなく 0%となったが、2 基の碑文に一部新編鎌倉志の別の見出しからの引用が認められた。

以上の結果をまとめると、新編鎌倉志の碑文への影響は 100%ではなく、ほぼ新編鎌倉志と内容が一致する碑文から、一部分のみ引用している碑文まで、その一致度はまちまちであり、また、その一致度には、とくに偏りはみられないことが分かった。

### 第3節 指導標「畠山重保邸跡」の対照分析

前節で行なった対照分析の方法に沿って、いくつかの指導標を取り上げ分析をおこなう。対象とする指導標は、第1章で示した先行研究のなかで取り上げられている指導標とし、新編鎌倉志との対照結果から考えられる新たな視点を確認する。

指導標「畠山重保邸跡」（史料2）は、先述の原が、新編鎌倉志による名所固定化の一例として取り上げた「畠山重保石塔」の横に建てられている。この指導標について、新編鎌倉志との対照作業を整理する。まず、題額だが、対象となる新編鎌倉志の見出しは、巻之七「畠山重保石塔」<sup>18</sup>になる。指導標の題額には「邸跡」と記されているため、「石塔」との記述と一致しない。しかし、「畠山重保石塔」の掲載文を参照すると、「又此石塔の西方を畠山屋敷と云。是も重保が舊宅ならん。」との記述がある。そのため、題額と見出しは不一致だが、新編鎌倉志の文中に題額の記載が認められた。（評価●）

つぎに、碑文と新編鎌倉志の対照結果について、センテンスごとに一致度を評価する（表2）。最初に、碑文と新編鎌倉志の記述が一致する箇所からみていく。「畠山重保ハ重忠ノ長子ナルガ」は、内容がほぼ一致しており、1文字のみ記載無、残り12文字を記載有と評価した。「兵ヲ遣シテ重保ノ邸ヲ圍ム重保奮闘ニ死ス時ニ元久二年六月二十二日」は「畠山重保石塔」に「【東鑑】に、元久二年六月廿二日、軍兵由比濱に競走て、謀叛の輩畠山六郎重保を誅すとあり。」と東鑑からの引用として日付の一致と内容の一致がみられる。但し、「重保ノ邸ヲ圍ム」との記述は新編鎌倉志になく、この7文字は記載無とした。「此ノ地即チ其ノ邸址ナリ」は、「畠山重保石塔」の記述と一致する。最後の「其ノ翌重忠亦偽リ誘ハレテ武藏國二俣川ニ鬪死ス」も内容の一致がみられる。以上より、168文字中70文字を一致と評価

した。一致度は41.7%で50%に達しない。

つぎに、記載無と評価した碑文は、上記で記載無とした8文字に加え、碑文の残りのセンテンス(90文字)すべて新編鎌倉志に記載はない。以上より、98文字を記載無と評価した。ここで、記載無と評価した碑文について、なぜ新編鎌倉志から引用していないのかを考えてみたい。「重保ノ邸ヲ圍ム」との指導標の記述だが、重保邸を囲んだとの記述は、新編鎌倉志だけでなく、その引用元である『吾妻鏡』にも「第十八 元久二年六月廿二日」に記載はない。

しかし、重保邸については、この指導標の題額が「畠山重保邸跡」であり、碑文にも「此ノ地即チ其ノ邸址ナリ」と記されていることから、指導標の建碑者が、この場所を重保邸と認識して指導標を造立したことは明らかである。そして、この題額と碑文は、巻之七「畠山重保石塔」の「又此石塔の西方を畠山屋敷と云。是も重保が舊宅ならん。」との記述と一致している。「重保ノ邸ヲ圍ム」との記述は、この新編鎌倉志の「重保が舊宅」の記述に則り、新編鎌倉志の吾妻鏡からの引用<sup>19</sup>部分「軍兵由比濱に競走て、謀叛の輩畠山六郎重保を誅す」の記述を膨らませたと考えられる。

「嘗テ北條時政ノ婿平賀朝雅ト忿争ス」から「乃チ實朝ノ命ヲ以テ」まで、新編鎌倉志に記載のない北条時政、平賀朝雅のくだりは、『吾妻鏡』に記述がある。新編鎌倉志が引用した元久二年六月廿二日ではなく、その一日前、元久二年六月廿一日条<sup>20</sup>と、指導標の碑文を対照すると、碑文の「嘗テ北條時政ノ婿平賀朝雅ト忿争ス朝雅其ノ餘怨ヲ畜ヘ重保父子ヲ時政ニ讒ス」は、『吾妻鏡』の「請ニ朝雅ニ去年爲ニ畠山六郎被ニ悪口ニ之讒訴。被ニ鬱陶」<sup>21</sup>と内容が一致する。

同様に「重忠ガ頼朝ノ薨後其ノ遺言ニ依リ頼家ヲ保護スル」は、「重忠治承兼四年以來。専ニ忠直ニ間。右大將軍依リ鑒ニ其志ニ給上。可ニ奉ニ護ニ後胤ニ之旨。遣ニ慰撫御詞ニ者也。」と一致する。一部、時政が「之ヲ忌ミ事ニ依リテ之ヲ除カント欲ス」と、建碑者の思いを記したとも考えられる文言も見受けられたが、概ねこのセンテンスは、直接吾妻鏡からの引用と考えられる。すなわち、建碑者たる青年団員たちは、新編鎌倉志だけにこだわらず原典たる『吾妻鏡』にも着目し、新編鎌倉志に記述のない部分は『吾妻鏡』から直接引用して、碑文を作成していたと認められる。

第1章で筆者は、原の述べる新編鎌倉志の影響を受けて、指導標が建碑された事例である可能性は否定できないと述べたが、実際に「畠山重保邸跡」の

建碑者は、建碑前の史蹟選定段階では新編鎌倉志の記述を基に、指導標の対象史蹟を選定したと考えられる。しかし、碑文については、新編鎌倉志の影響がすべてとは言えず、記載がない部分の『吾妻鏡』からの直接引用が認められることから、建碑者がより手間をかけて鎌倉の歴史を顕彰しようとする姿勢が垣間見られた。

#### 第4節 指導標「問注所舊蹟」の対照分析

第1章にて紹介した関が「裁許橋」との関係性に言及した指導標「問注所舊蹟」（史料3）について分析を進める。題額の対象となる新編鎌倉志の見出しは巻之五「裁許橋」<sup>21</sup>であり、問注所ではない。しかし、この「裁許橋」の掲載文を参照すると、「問注所を郭外に建らる。」と記載されている。そのため、先述の「畠山重保邸趾」と同じく、新編鎌倉志の文中に題額の記載が認められる。（評価●）

つぎに、碑文と新編鎌倉志の掲載文を対照する（表2）。碑文冒頭の元暦元年の問注所の記述「元暦元年源頼朝幕府東西ノ廂ヲ以テ訴訟裁斷ノ所ト為ス之ヲ問注所ト稱ス」は、新編鎌倉志に記載はない。この部分は、『吾妻鏡』元暦元年十月廿日の記事「仍點御亭東面廂二ヶ間。爲其所。号問注所。打額<sup>22</sup>」<sup>22</sup>からの引用と認められるが、言い回しが一部異なる。新編鎌倉志「裁許橋」には、「頼朝の時、此所に屋敷有て訴訟を決斷す。」との記述もあるため、『吾妻鏡』と新編鎌倉志双方を参考に碑文を作成したとも考えられる。

「其ノ諸人羣集シ時ニ喧噪ニ渉ルコトアルヲ厭ヒテ正治元年頼家之ヲ邸外ニ遷ス」は、新編鎌倉志に吾妻鏡からの引用として記載されている文言と内容、言い回しともに近い。新編鎌倉志「裁許橋」には、「【東鑑】に、正治元年四月一日、頼家將軍の時、問注所を郭外に建らる。」「諸人羣集して、鼓騷をなし、無大禮をあらはすの條、頗る狼藉の基たり。」との記述がある。これは、『吾妻鏡』第十六からの引用と認められる。

但し、『吾妻鏡』において、その年は建久十年二月より記事が始まり、「建久十年巳未 四月廿七日爲正治元年」<sup>23</sup>との記述が認められる。したがって、正確には、正治元年四月一日ではなく、建久十年四月一日が正しい。しかし、指導標の碑文も新編鎌倉志とともに正治元年と記す。すなわち、この箇所から考えると、建碑者は、新編鎌倉志の表記に倣った可能性が考えられる。

以上の対照により、総文字数 79 文字のうち、66 文字が記載有となり、一致度の評価は 83.5%と高い

評価となった。しかしながら、その引用箇所は、『吾妻鏡』における問注所の記述が主であり、とくに「裁許橋」についての引用は見られなかった。ただし、一部の言い回しや、正治元年の記述など、新編鎌倉志を参考とした痕跡も認められた。

この指導標は、あくまで鎌倉幕府の重要施設である問注所の顕彰が目的と考えられる。したがって、碑文にみる指導標「問注所舊蹟」の顕彰内容からは、関の述べる新編鎌倉志の「裁許橋」にまつわる事象の影響は受けていないと認められる。あくまで、建碑場所の選定においてのみ、問注所についての記述がある新編鎌倉志「裁許橋」の内容を踏まえて、裁許橋の近くに造立したということではないだろうか。

### 第3章 指導標の碑文と新編鎌倉志の対照分析結果に対する考察

#### 第1節 造立年代による新編鎌倉志との関係の変化

第2章において行った指導標と新編鎌倉志との対照分析では、指導標の題額については、新編鎌倉志の見出しとの一致がみられ、対象とする史蹟の選定について、新編鎌倉志の影響が大きさがみてとれた。対して碑文については、碑文の文字数の 50%を超えて新編鎌倉志と一致する指導標は 37 基に対して、50%以下の指導標がほぼ同数の 39 基にのぼり、新編鎌倉志に 100%依存していない可能性が示された。このことは、対象とする史蹟を示す題額と顕彰対象である歴史を叙述しようとする碑文との性格の違い、史蹟選定における場所の顕彰と碑文で表現する歴史の顕彰との違いを示しているとも考えられる。

ここで、さらに碑文と新編鎌倉志との対照分析を詳細に検証するため、時間軸の要素を取り入れ、指導標造立前・中・後期ごとの新編鎌倉志との関係性を捉え、建碑者の造立意図の変化に対する新編鎌倉志の影響を分析したい。因みに、この三期の区分は、先述の建碑に深く携わった青年団副団長小坂が造立に関わっているか否かで区分した<sup>23</sup>。

まず題額の変化について、新編鎌倉志の記載内容が一致している◎○●の比率（図2）を足すと、前期 88.2%、中期 93.3%のところ、後期に 75.8%と比率を落としている。これは、題額との一致度の低い△評価と題額の記載がない×評価の比率が増えているため、後期の題額と新編鎌倉志の関係性に何らかの変化がみてとれる。

つぎに、碑文について（図4）をみると、s 各々の傾向は、概ね通期で捉えた傾向（図3）と同様で、とくに一致度に偏りはみられず、まちまちの傾向を示している。そのなかで、特異な傾向を示すのが、

一致度A(75.1%~100.0%)とB(50.1%~75.0%)の両者の変化である。一致度Aは、前期の造立数に占める比率17.6%(3基)から中期は23.3%(7基)後期は36.4%(12基)と比率を伸ばしているのに対し、一致度Bでは、前期23.5%(4基)から中期は26.7%(9基)後期はわずか9.1%(3基)に激減している。これは新編鎌倉志からの影響の多い碑文については、年代が下がるにしたがいその依存度が増す傾向が認められることを示している。

それに対して、新編鎌倉志の影響が弱い傾向を示す一致度D(0.1%~25.0%)、C(25.1%~50.0%)については、三期を通じて比率に特徴的な変化はみられない。強いてあげれるとするならば、完全に不一致のE(0%)が、前期には存在せず、中期に初めて1基、後期に3基が認められる点である。

この年代が下がるにしたがい新編鎌倉志への依存度が増す傾向について、実際の事例を挙げてその意味を考えたい。前期で一致度Bの4基の題額は、「北條執權邸舊蹟」、「足利公方邸舊蹟」、「永福寺舊蹟」、「青砥藤綱邸舊蹟」である。そして、これら4基の題額の対象とする史蹟をみると、鎌倉幕府に関係の深い施設や寺院が多い。

対して、後期の新編鎌倉志への依存度の高い一致度Aの指導標12基の題額をみると、「相馬次郎師常之墓」、「夷堂橋」、「佐竹屋敷跡」、「辨谷」、「柳原」、「聖福寺趾」、「主馬盛久之頸坐」、「日蓮上人草菴趾」、「假粧坂」、「朝夷奈切通」、「鐵井」、「義経宿陣之趾」となり、先述の前期の題額と様相が異なっている。これらは鎌倉幕府に直接関連する史蹟ではない。また「夷堂橋」、「鐵井」は、その初出が新編鎌倉志と考えられる所謂、鎌倉十橋、鎌倉十井の一つである。

このことは、前章で取り上げた指導標「問注所舊蹟」にみられた、直接『吾妻鏡』などの原典も参照し引用する事象が減り、新編鎌倉志の記述のみで完結する、すなわち、新編鎌倉志を原典とする史蹟が増えたために、一致度の割合が増加したと捉えることもできる。この指導標が対象とする史蹟の性格の変化については別稿にて論ずる予定であるが、選定される史蹟の性格が、年代の経過と共に鎌倉幕府といった認知度の高い史蹟から、よりローカルな史蹟へと広がりを見せたとするならば、その顕彰する歴史の原典としての地誌としての役割を新編鎌倉志は担った可能性も否定できない。

最後に、先述の指導標「問注所舊蹟」にもみられた『吾妻鑑』など新編鎌倉志の引用文献について、整理を加えたい。書誌学の面から新編鎌倉志を論じ

た白石克<sup>24</sup>も指摘しているが、新編鎌倉志には文中に引用文献が呈示されている。そこで、今回指導標と対照した新編鎌倉志の対象箇所について、新編鎌倉志本文中で表記されている引用文献を(表1)に掲載した。

また、とくに『吾妻鏡』(表1◇で表記)と『太平記』(表1□で表記)について個別に抽出した。集計すると、『吾妻鑑』35基『太平記』9基、両者合計44基という結果となった。とくに前期は、『吾妻鑑』8基『太平記』4基、両者合計全17基中12基と、ほぼこの2典が引用元という結果となった。

では、実際にどのように引用されているのかについて、前章第2節で事例として取り上げた「指導標「北條執權邸舊蹟」(史料1)を再び用いて、碑文の引用文献を整理したい。本標は、指導標前期の大正7(1918)年造立で、新編鎌倉志との一致度は55.3%であり、先述の前期で造立数に占める比率の高かった一致度Bの4基の中に含まれる。新編鎌倉志の対象箇所である巻之七「寶戒寺 附北條屋敷」には、引用文献について「東鑑」<sup>25</sup>と「太平記」の記載がある。碑文内に「寶戒寺」についての記述もあることから、建碑者が新編鎌倉志をみている可能性は高い。

ここで、新編鎌倉志と不一致と評価した箇所をみてみたい。前章でみた碑文の不一致箇所「彼ノ相模入道ガ朝暮ニ宴筵ヲ張り時ニ田樂法師ニ對シ列坐ノ宗族巨室ト俱ニ直垂大ロヲ爭ヒ解キテ纏頭ノ山ヲ築ケリト言フモ此ノ亭ナリ」は、田樂云々の記載が新編鎌倉志に一切みられない。しかし、太平記第五巻「相模入道田樂好田樂事并犬事」には、「相模入道此事ヲ聞テ、〈中略〉日夜朝暮ニ是ヲ弄フ事他事ナシ、見物之一族大名、我レ劣ラシト直垂大ロヲ脱テ拋出ス、集メテ是ヲ積ニ山ノ如シ」<sup>26</sup>と、碑文と言い回しは異なるものの、内容の一致する記述がある。

したがって、碑文のこの箇所は、『太平記』から直接の引用と考えられる。つまり、「北條執權邸舊蹟」の碑文においても、先述の「畠山重保邸趾」、「問注所舊蹟」と同様に、新編鎌倉志と原典である『太平記』双方を共に参考とし、碑文を作成していた可能性が考えられる。さらに、先述のとおり、前期において、新編鎌倉志に完全に依存した碑文がみられない点は、このように原典からの引用を新編鎌倉志の内容に加えた碑文が多い可能性が考えられるのである。

## 第2節 新編鎌倉志との関係性がみられない指導標

第2章第2節の対照の結果、新編鎌倉志との関係性が全くみられずE(0%)評価となった「大江廣元邸

址」(史料 4)、「日蓮聖人辻説法之趾」(史料 5)、「下馬」(史料 6)、「松谷寺及佐介文庫趾」(史料 7)の4基について、その要因を考察する。この4基の造立年代をみると、「大江廣元邸址」が大正14(1925)年の中期、他の3基は昭和11(1936)年、12(1937)年、15(1940)年で後期の造立である。したがって、年代的に史蹟の選定がよりローカルな史蹟へと広がりを見せていた時期となる。

このことは、この4基の碑文をみるとより具体的に様相が見えてくる。「大江廣元邸址」(史料 4)は、題額だけみると鎌倉幕府の重要人物であり、前期に多く造立された鎌倉幕府の顕彰とみられなくもない。しかし、碑文を詳細にみていくと全く異なる様相がみえてくる。碑文の前半こそ広元の功績についての記述がみられるが、題額に記された屋敷についての記述は一切みられず、さらに後半は広元の子孫である毛利氏の顕彰が主となる。結果、明治政府の中枢にいたる長州藩閥との関連を考えざるを得ない。

つぎに「日蓮聖人辻説法之趾」(史料 5)と「下馬」(史料 6)については、近代における日蓮主義<sup>27</sup>との関連が認められる。まず「下馬」については、八幡宮に詣でる武者が馬を下りるという本来の意味を冒頭に記すものの、半ばより地名と関係のない日蓮の逸話が続く。「日蓮聖人辻説法之趾」に至っては、日蓮主義に基づき明治以降に定着した辻説法の逸話<sup>28</sup>に則り、明治34(1901)年に整備された史蹟空間<sup>29</sup>に造立されたもので、近世以来の新編鎌倉志由来の名所とは全く性格の異なる史蹟である。

最後に、「松谷寺及佐介文庫趾」(史料 7)は、昭和5(1930)年に金澤文庫所蔵の佛書の奥書から発見されて中世の鎌倉に存在したことが明らかとなったもので、新編鎌倉志を含む既存の地誌、史料には全く記載のない文庫である<sup>30</sup>。碑文の内容は、昭和15(1940)年造立の10年前の出来事となる発見時の状況を記すなど時事ネタ的記述が多く、他の指導標と一線を画している。

このように、これら新編鎌倉志と全く関連性の見られない4基に共通することは、とくに鎌倉幕府の顕彰に重きを置いておらず、内容も鎌倉の顕彰が中心とは言い難い点である。前節において、年代の経過と共によりローカルな史蹟へと史蹟の性格に変化が認められると述べ、また新編鎌倉志を原典とする史蹟の増加にも言及したが、この4基の特徴はこの傾向とは相反している。これは、新たな性格の指導標造立を模索する中での新たな型とも捉えることもできる。しかし、これらの特異性を考えるならば、その性格を無視することはできないと考える。この

4基の検証は今後の課題としたい。

## おわりに

本稿では、指導標全基の題額と碑文について、新編鎌倉志の記述内容と対照し、題額については指導標記載の有無、碑文についてはその一致度を数値的に評価し、指導標が新編鎌倉志の影響をどの程度受けているのかを分析した。結果、題額については、指導標80基中74基の『新編鎌倉志』にも何らかの記載があることが分かった。対して碑文については、指導標80基中76基について何らかの記載があるものの、新編鎌倉志との一致度はまちまちで、ほぼ全文にわたり引用している指導標から、ごく一部の箇所のみ引用されているものまで、多岐にわたることが明らかとなった。

この結果から、指導標の題額、すなわち、対象としている史蹟の選定においては、新編鎌倉志の多大な影響が認められるが、碑文については、新編鎌倉志の影響に加えて、建碑者たる青年団員たちが新編鎌倉志以外の文献も参照のうえで、より手間をかけて鎌倉の歴史を顕彰しようとした証しがみてとれた。そして、本稿にて具体的な数値を呈示し、指導標と新編鎌倉志との関係性が実証されたことは、これまで感覚的に捉えられてきた新編鎌倉志の影響を可視化して示しえた新たな成果と評価できる。

筆者の指導標碑文研究における喫緊の課題についてあげておきたい。それは、新編鎌倉志との対照で記載無と評価した碑文の記述箇所について、原典が何かを検証することである。先述の「北條執權邸舊蹟」の事例において、新編鎌倉志に記載がない『太平記』の田楽についての逸話が、新編鎌倉志を経ずに直接碑文に引用されている点を指摘した。同様に他の指導標の記載無し評価の碑文について、原典から直接引用されている事例、とくに『吾妻鏡』と『太平記』からの引用について、各々碑文と対照することによりあきらかにしていきたい。

このように、指導標の碑文の観点から、歴史資料としての評価をすすめる作業は、本稿にて途にいたばかりである。しかし、本稿にて示した新編鎌倉志の影響を端緒として、指導標と様々な史料との関係性を明らかにすることにより、建碑者の造立意図、すなわち、近代鎌倉の人々が鎌倉の何を顕彰しようとしたのか、鎌倉の歴史の再評価の意味を考えることができると考えている。引き続き、指導標の碑文分析の作業を進めてまいりたい。

最後に、第3章第2節でとりあげた、新編鎌倉志の影響が全くみられない4基についても、今後の検



討課題として取り上げたい。「大江廣元邸址」の碑文にみられる毛利氏の顕彰は、近代国家を樹立した明治政府の顕彰や陸軍との関係性を想起させる。拙稿<sup>3)</sup>にて指導標の建碑経緯を述べた際に、鎌倉町内の青年団員と在郷軍人分会の会員に同時加入している者が多い点に着目し、両団体の密接な関係性について言及した。また鎌倉には明治政府要人の別荘も多かったことも踏まえれば、建碑に至る背景も自ずと理解できる。

#### 註

- <sup>1</sup> 本稿は、以下2点の史料を基に「史蹟指導標」に表記を統一して用いる。指導標という表記は管見の限りこの鎌倉の事例以外見出せない。  
①鎌倉市青年團『鎌倉』鎌倉市青年團、1941年、巻頭頁。「緒言」において団長の蔵並長勝が「神奈川縣及び鎌倉市當局の援助の下に、史都鎌倉の數多い埋もれた史蹟舊址を採ね、史蹟指導標を建設し來つた。」と記している。「史蹟指導標」は、建碑が行われた戦前において、「旧蹟保存指導標」、単に「指導標」など、まちまちな表記が散見されるが、建碑団体の鎌倉市青年団が発行した本書において、「史蹟指導標」という表記に統一された。  
②鎌倉市市史編さん委員会『鎌倉市史 近代通史編』吉川弘文館、1994年、p. 433。本書は「史蹟指導標」の表記を用いている。
- <sup>2</sup> 河井恒久友水纂述、松村清之伯胤考訂、力石忠一叔貫參補『新編鎌倉志』洛陽・柳枝軒、1685。全八巻・12冊。
- <sup>3</sup> 本稿は、近代の「史蹟」について論じる論考である。したがって、文化財保護法の表記であり、現在一般に用いられている「史跡」ではなく、史蹟名勝天然記念物保存法で用いられ、近代に一般的であった「史蹟」に表記を統一して用いる。なお、戦後の文化財保護法制定以降の対象を取り上げる場合は、「史跡」の表記とする。
- <sup>4</sup> 羽賀祥二『史蹟論 —19世紀日本の地域社会と歴史意識—』名古屋大学出版会、1998年、p. 8/p. 20。羽賀祥二は、「石碑に歴史的史蹟の内容や社会的評価などを文章として刻み込んだもの」を「記念碑」と定義し、史蹟に造立された石碑を「史蹟記念碑」としている。指導標は、鎌倉の青年団員たちが、歴史的史蹟を「評価」したうえで世間に明らかにする、「顕彰」行為を意図して建碑に至ったものである。筆者は、この建碑者の顕彰意図をより明確に示すため、歴史的史蹟を顕彰する石碑を「歴史顕彰碑」、さらに、史蹟を顕彰する石碑を

さらに、「日蓮聖人辻説法之趾」と「下馬」にみられる日蓮主義との関連性は、青年団員のなかに日蓮宗徒が在籍していた可能性を踏まえれば、納得のいく建碑とも考えられる。指導標は昭和16(1941)年の青年団解散により戦前の建碑が終わりを迎えるが、時代性も考慮すると、このような特異な指導標がその後も増加していた可能性も否定できない。この4基については、今後も検証作業を続けてまいりたい。

「史蹟顕彰碑」と定義したい。

- <sup>5</sup> 小坂藤若『随筆 あとの鴉』1970年、pp. 197-200。  
小坂藤若(1895~1979)は、八雲神社(鎌倉市大町)の神職の家に生まれ、八雲神社宮司を務めながら、鎌倉町役場にも職員として在籍、戦後に鎌倉市助役(1957~1959)を務める。鎌倉市青年団では、幹事、副団長を歴任する。
- <sup>6</sup> 岸本洋一「近代鎌倉の青年団による指導標の建碑 —副団長の記録に見る建碑の詳細—」『京都芸術大学大学院紀要』1号、2021年、pp. 70-127。
- <sup>7</sup> ①白石克「はじめに」『新編鎌倉志(貞享二刊) 陰印・解説・索引』(白石克編)汲古書院、2003年、pp. 1-2。白石克は、新編鎌倉志について書誌学の視点から論じている。白石によれば新編鎌倉志は、情報量の多さ、豊富な参考文献の明示、学究的な悉皆調査による民俗伝承の拾い上げを基礎としつつ、信頼のおける参考・引用文献を史料根拠に使用し考証する執筆態度により、現代でも学術的に使用できる書とされているとする。  
②白石克「解説」『新編鎌倉志(貞享二刊) 陰印・解説・索引』(白石克編)汲古書院、2003年、pp. 265-275。新編鎌倉志は、版木を作り変える(再版)ことなく明治まで印刷が続けられた。現存本で最新の出版年が明治34(1901)年であることから、実に200年以上にわたり刷られていたことになる。そして、この供給され続けたという事実が、鎌倉名所の固定化を明治時代まで継続させる要因となり、必然的に近代鎌倉の史蹟選定にも影響を与えた可能性が考えられる。
- <sup>8</sup> 稲葉一彦『「鎌倉の碑」めぐり』表現社、1982年。
- <sup>9</sup> 関幸彦『「鎌倉」とはなにか 中世、そして武家を問う』山川出版社、2003年、pp. 111~116。  
関は、裁許橋の名が出てくる『鎌倉日記』では、「西行橋」の名とともに登場するため、「かりに裁許橋の呼称が、水戸黄門こと光圀以来だとすれ



- ば、『吾妻鏡』の問注所移転の記事をあまりに深読みしすぎた結果ということにならうか」と推察する。
- <sup>10</sup> 徳川光圀「鎌倉日記」『鎌倉市史 近世近代紀行地誌編』吉川弘文館、1985 年、pp. 28-105。  
『鎌倉日記』成立は、延宝二(1674)年。
- <sup>11</sup> 原淳一郎「近世における参詣行動と歴史意識—鎌倉の再発見と懷古主義—」『歴史地理学』47-3 号、2005 年、pp. 1-23 頁。「鎌倉名所は、近世初頭に存在していた民族伝承(土俗・里俗)が、肯定・否定を問わず、新編鎌倉志に掲載されることで公的権威が付され、構築されていった。」と述べ、新編鎌倉志により鎌倉の名所は以後固定化されたとする。
- <sup>12</sup> 鎌倉朝日新聞社編集室「針磨橋の案内板を新設」鎌倉朝日 494、2020 年、p. 1。2020 年 5 月 1 日号の記事より、「2019 年 5 月末、鎌倉市極楽寺所在の指導標「針磨橋」が撤去・処分されたことが判明した。」。したがって、1 基が滅失し、現在 79 基が現存している。
- <sup>13</sup> 岸本前傾論文(6)、p. 80。大正 6 年と大正 7 年に合わせて 11 基が建碑されたのを皮切りに、1 年の間隔を空け、大正 9(1920)年から、鎌倉町青年会・鎌倉町青年団・鎌倉市青年団の 3 団体により、ほぼ毎年平均 3 基ずつの指導標が建てられていったことがわかる。
- <sup>14</sup> 村上征勝、金明哲、土山玄、上阪彩香『計量文献学の射程』勉誠出版、2016 年。
- <sup>15</sup> 大日本地誌大系刊行会編、日本歴史地理学会校訂『大日本地誌大系 第 5 冊 新編鎌倉志 鎌倉攬勝考』大日本地誌大系刊行会、1915 年。
- <sup>16</sup> 大日本地誌大系刊行会編前掲書(15)、pp. 119-120。
- <sup>17</sup> 大日本地誌大系刊行会編前掲書(15)、p. 121。
- <sup>18</sup> 大日本地誌大系刊行会編前掲書(15)、p. 125。
- <sup>19</sup> 黒板勝美編『国史大系 第 32 卷 新訂増補』国史大系刊行会、1932 年、p. 625。本稿では、指導標造立期と同時代史料との観点から、昭和 7(1932)年刊行の本書、および、昭和 8(1933)年刊行の『国史大系 第 33 卷 新訂増補』「吾妻鏡後篇」を用いる。
- <sup>20</sup> 黒板勝美編前掲書(19)、p. 625。
- <sup>21</sup> 大日本地誌大系刊行会編前掲書(15)、p. 97。
- <sup>22</sup> 黒板勝美編前掲書(19)、p. 124。
- <sup>23</sup> 前期：大正 6(1917)年～大正 10(1921)年、中期：大正 11(1922)年～昭和 6(1931)年(小坂藤若が建碑に携わったと考えられる年代)、後期：昭和 7(1932)年以降と設定した。
- <sup>24</sup> 白井克前掲書(7)①、p. 1。
- <sup>25</sup> 新編鎌倉志においては、『吾妻鏡』を「東鑑」と表記している。本稿でも、新編鎌倉志からの引用の場合は、「東鑑」表記を用いる。
- <sup>26</sup> 鷲尾順敬校訂『太平記 西源院本』刀江書院、1936 年、p. 105。本稿では、指導標造立期と同時代史料との観点から、古くに書写されたとされる西源院本の本書を用いた。
- <sup>27</sup> 大谷栄一『近代日本の日蓮主義運動』法藏館、2001 年。
- <sup>28</sup> ブレニア・フレア「近世末期・近代における日蓮像の構築の一側面—辻説法に着目して—」『同朋大学佛教文化研究所紀要』41 号、2022 年、pp. 43-68。
- <sup>29</sup> ブレニア前掲書(28)、P. 50。日蓮主義を唱えた田中智学により、明治 34(1901)年に顕彰碑とともに整備された史蹟空間。
- <sup>30</sup> 熊原政男「金澤文庫書誌の研究」『金澤文庫研究紀要』1 号、1961 年、P. 34。
- <sup>31</sup> 岸本前傾論文(6)、p. 88。

(表1) 史蹟指導標の一覧①

No.	題額	建立年		建立期	建立団体	新編鎌倉志						
		和暦	西暦 (年)			対照結果一致度		対象箇所 見出し		対象箇所引用文献		
						題額	碑文	巻名	名称	(新編鎌倉志記載)※	吾妻鑑	太平記
1	勝長壽院舊蹟	大正6年3月	1917	前	会	●	A 80.0%	巻之二	大御堂谷 附御堂御所舊跡	東鑑	◇	
2	大藏幕府舊蹟	大正6年3月	1917	前	会	●	D 14.8%	巻之二	頼朝屋敷	東鑑	◇	
3	俊基朝臣墓所	大正6年3月	1917	前	会	△	C 48.0%	巻之四	葛原岡	神明鏡		
4	問注所舊蹟	大正6年3月	1917	前	会	●	A 83.5%	巻之五	裁許橋	東鑑	◇	
5	稲村崎	大正6年3月	1917	前	会	◎	D 10.7%	巻之六	稲村 附稲村崎横手原	太平記		□
6	段葛	大正7年3月	1918	前	会	●	A 75.2%	巻之一	鶴岡八幡宮 附 雪下 由比濱 新宮	東鑑	◇	
7	若宮大路幕府舊蹟	大正7年3月	1918	前	会	●	C 39.3%	巻之二	頼朝屋敷	東鑑	◇	
8	東勝寺舊蹟	大正7年3月	1918	前	会	◎	C 41.9%	巻之七	葛西谷 附東勝寺舊跡 弾琴松	太平記		□
9	北條執権邸舊蹟	大正7年3月	1918	前	会	○	B 55.3%	巻之七	寶戒寺 附北條屋敷・葛西谷	東鑑、太平記	◇	□
10	二十五坊舊蹟	大正7年3月	1918	前	会	●	C 41.9%	巻之一	浄國院	成氏の年中行事		
11	饑渴島	大正7年12月	1918	前	同	◎	D 22.7%	巻之五	飢渴島			
12	足利公方邸舊蹟	大正9年3月	1920	前	会	○	B 72.4%	巻之二	公方屋敷 附飯森山 御馬冷場			
13	永福寺舊蹟	大正9年3月	1920	前	会	◎	B 50.5%	巻之二	永福寺舊跡	東鑑	◇	
14	阿佛邸舊蹟	大正9年3月	1920	前	会	○	C 46.5%	巻之六	月影谷 附阿仏屋敷	十六夜日記		
15	宇津宮辻幕府舊蹟	大正10年3月	1921	前	会	△	C 46.6%	巻之二	頼朝屋敷	東鑑	◇	
16	青砥藤綱邸舊蹟	大正10年3月	1921	前	会	●	B 52.3%	巻之二	滑川	太平記		□
17	太田道灌邸舊蹟	大正10年3月	1921	前	会	○	D 14.1%	巻之四	英勝寺 附太田道灌舊跡			
18	文覺上人屋敷迹	大正11年3月	1922	中	団	○	C 31.8%	巻之二	文覚屋敷	東鑑	◇	
19	扇谷上杉管領屋敷迹	大正11年3月	1922	中	団	○	D 21.0%	巻之四	上杉定正舊宅	鎌倉九代記		
20	畠山重保邸址	大正11年3月	1922	中	団	●	C 41.7%	巻之七	畠山重保石塔	東鑑	◇	
21	畠山重忠邸址	大正12年3月	1923	中	団	○	A 86.8%	巻之一	筋替橋 附畠山重忠屋敷 鎌倉十橋	東鑑	◇	
22	比企能員邸址	大正12年3月	1923	中	団	○	B 70.1%	巻之七	妙本寺 附比企谷 比企能員舊跡 竹御所跡	東鑑	◇	
23	稲瀬川	大正12年3月	1923	中	団	◎	A 82.7%	巻之五	稲瀬河	東鑑、萬葉集、梅松論	◇	
24	法華堂跡	大正13年3月	1924	中	団	○	D 13.7%	巻之二	法華堂 附頼朝並義時墓			
25	和賀江島	大正13年3月	1924	中	団	◎	C 39.2%	巻之七	和賀江島	東鑑	◇	
26	土佐坊昌俊邸址	大正14年3月	1925	中	団	○	D 13.9%	巻之七	土佐房屋敷跡			
27	大江廣元邸址	大正14年3月	1925	中	団	×	E 0.0%					
28	足達盛長邸址	大正14年3月	1925	中	団	○	D 9.6%	巻之五	藤九郎盛長屋敷	東鑑	◇	
29	玉縄城趾	大正15年1月	1926	中	同	●	D 0.5%	巻之三	玉縄村			
30	木曾冠者義高之塚	大正15年1月	1926	中	同	○	C 47.7%	巻之三	木曾塚	東鑑	◇	
31	永安寺址	大正15年3月	1926	中	団	○	B 68.5%	巻之二	永安寺舊跡			
32	東御門	大正15年3月	1926	中	団	◎	A 100.0%	巻之二	東御門・西御門	東鑑	◇	
33	西御門	大正15年3月	1926	中	団	◎	B 68.3%	巻之二	西御門・報恩寺・保壽院・高松寺・来迎寺	東鑑	◇	
34	星月井	昭和2年3月	1927	中	団	○	C 47.6%	巻之六	星月夜井 附虚空藏堂	北国紀行		
35	大慈寺跡	昭和3年3月	1928	中	団	○	B 55.7%	巻之二	大慈寺舊跡	東鑑	◇	
36	源氏山	昭和3年3月	1928	中	団	◎	B 68.9%	巻之四	源氏山	洞林採葉抄、鎌倉九代記、採葉抄		
37	元八幡	昭和3年3月	1928	中	団	○	A 95.5%	巻之一・七	鶴岡八幡宮 附由比濱 下宮舊地	東鑑	◇	
38	藤谷黄門遺蹟	昭和4年3月	1929	中	団	●	B 58.1%	巻之四	綱引地藏、藤原為相石塔 附忍性石塔・藤谷	十六夜日記		
39	乱橋	昭和4年3月	1929	中	団	◎	A 93.0%	巻之七	亂橋 附連理木	東鑑	◇	
40	塔之辻	昭和4年3月	1929	中	団	○	B 72.6%	巻之五	塔辻	東鑑	◇	

- 建立期：前：前期(1917～1921)、中：中期(1922～1931)、後：後期(1932～1941・1956)
- 建立団体：会・鎌倉町青年会、団・鎌倉町青年団、市・鎌倉市青年団、友・鎌倉友青会、同・鎌倉同人会
- 題額と新編鎌倉志との一致度：◎見出しと完全一致、○見出しと意味が一致、●見出しと不一致。新編鎌倉志文中に題額の記載あり△見出しと不一致。文中に題額の記載一部あり、×見出しと不一致。文中に記載なし
- 指導標碑文と新編鎌倉志掲載文との一致度：A:100.0%～75.1%、B:75.0%～50.1%、C:50.0%～25.1%、D:25.0%～0.1%、E:0%

※ 新編鎌倉志  
掲載の表記で記  
載（「東鑑」な  
り）

(表1) 史蹟指導標の一覧②

No.	題額	建立年		建 立 期	建 立 団 体	新編鎌倉志							対象箇所引用文献		
		和暦	西暦 (年)			対照結果一致度		対象箇所 見出し			対象箇所引用文献 (新編鎌倉志記載)※	吾妻鑑	太平記		
						題額	碑文	巻名	名称						
41	荏柄天神	昭和4年12月	1929	中	団	◎	D 17.9%	巻之二	荏柄天神 附和田平太胤長屋敷	東鑑	◇				
42	今宮	昭和4年12月	1929	中	団	○	B 65.9%	巻之一	新宮	東鑑、神明鏡	◇				
43	萬葉集研究遺蹟	昭和5年2月	1930	中	団	×	D 16.6%	巻之七	竹御所舊跡						
44	關取場跡	昭和6年3月	1931	中	団	●	A 77.9%	巻之二	荏柄天神 附和田平太胤長屋敷						
45	太平寺跡	昭和6年3月	1931	中	団	○	A 88.2%	巻之二	高松寺 附太平寺舊蹟						
46	長楽寺跡	昭和6年3月	1931	中	団	●	D 13.4%	巻之五	佐佐目谷 附経時墓						
47	十一人塚	昭和6年3月	1931	中	団	◎	C 45.8%	巻之六	十一人塚	太平記		□			
48	理智光寺址	昭和7年3月	1932	後	団	○	C 28.3%	巻之二	理智光寺						
49	相馬次郎師常之墓	昭和7年3月	1932	後	団	○	A 84.8%	巻之四	相馬天王祠	東鏡	◇				
50	夷堂橋	昭和7年3月	1932	後	団	◎	A 99.1%	巻之一・二・七	筋替橋・滑川・夷堂橋						
51	佐竹屋敷跡	昭和7年3月	1932	後	団	○	A 82.1%	巻之七	佐竹屋敷	東鑑	◇				
52	辨谷	昭和7年3月	1932	後	団	◎	A 85.1%	巻之七	辨谷 崇壽寺舊跡	田代系園					
53	極楽寺坂	昭和7年3月	1932	後	団	○	B 55.3%	巻之六	極楽寺 附切通 辨慶腰懸松	太平記		□			
54	柳原	昭和9年3月	1934	後	団	◎	A 83.1%	巻之一	柳原	歌枕名寄					
55	蓮華寺趾	昭和9年3月	1934	後	団	◎	C 45.5%	巻之五	蓮華寺跡	鎌倉大日記					
56	聖福寺趾	昭和9年3月	1934	後	団	○	A 82.3%	巻之六	聖福寺舊跡	東鑑	◇				
57	上杉朝宗及氏憲邸趾	昭和10年3月	1935	後	団	●	C 30.9%	巻之二	犬懸谷 附衣張山 短尺石						
58	偏界一覽亭舊跡	昭和10年3月	1935	後	団	○	B 56.4%	巻之二	偏界一覽亭跡	一覽亭集					
59	主馬盛久之頸坐	昭和10年3月	1935	後	団	○	A 87.1%	巻之五	盛久頸座	長門本平家物語					
60	日蓮聖人辻説法之趾	昭和11年3月	1936	後	団	×	E 0.0%								
61	藤原仲能之墓	昭和11年3月	1936	後	団	×	D 15.5%	巻之四	道智塚						
62	町屋趾	昭和11年3月	1936	後	団	△	D 20.7%	巻之七	大町 附米町・辻町	東鑑	◇				
63	歌之橋	昭和12年3月	1937	後	団	○	C 31.9%	巻之二	歌橋・荏柄天神 附和田平太胤長屋敷	東鑑	◇				
64	源平池	昭和12年3月	1937	後	団	△	C 40.5%	巻之一	辨財天社	東鏡	◇				
65	下馬	昭和12年3月	1937	後	団	×	E 0.0%								
66	青砥藤綱舊蹟	昭和13年3月	1938	後	団	●	C 47.4%	巻之二	滑川	太平記		□			
67	荒居閭魔堂趾	昭和13年3月	1938	後	団	○	C 50.0%	巻之七	新居閭魔	鎌倉年中行事					
68	針磨橋	昭和13年3月	1938	後	団	◎	D 20.9%	巻之六	針磨橋						
69	筋替橋	昭和14年3月	1939	後	団	◎	D 5.4%	巻之一	筋替橋 附畠山重忠屋敷 鎌倉十橋						
70	日蓮上人草菴趾	昭和14年3月	1939	後	団	●	A 100.0%	巻之七	安國寺 附松葉ヶ谷						
71	染屋太郎大夫時忠邸趾	昭和14年3月	1939	後	団	△	B 60.6%	巻之五	塔辻	詞林採葉抄					
72	假粧坂	昭和15年3月	1940	後	市	◎	A 82.4%	巻之四	假粧坂	東鏡・太平記	◇	□			
73	松谷寺及佐介文庫趾	昭和15年3月	1940	後	市	×	E 0.0%								
74	宿谷光則屋敷跡	昭和15年3月	1940	後	市	○	C 49.1%	巻之五	光則寺 附宿屋光則舊跡						
75	朝夷奈切通	昭和16年3月	1941	後	市	◎	A 84.0%	巻之八	朝夷名切通 附上總介石塔 梶原太刀洗水	東鑑	◇				
76	鐵井	昭和16年3月	1941	後	市	◎	A 84.7%	巻之四	鐵井 附鐵観音 鎌倉十井	東鑑	◇				
77	義経宿陣之趾	昭和16年3月	1941	後	市	●	A 81.9%	巻之六	満福寺 附硯池	東鑑	◇				
78	日蓮上人祈雨旧跡	昭和31年3月	1956	後	友	△	D 22.9%	巻之六	金洗澤	東鑑	◇				
79	洲崎古戦場	昭和31年3月	1956	後	友	●	C 42.4%	巻之三	洲崎村 附寺分村町家村	太平記		□			
80	玉縄城址	昭和31年3月	1956	後	友	●	D 3.1%	巻之三	玉縄村	關東兵亂記・鎌倉九代記・北條盛衰記					

● 建立期：前：前期(1917～1921)、中：中期(1922～1931)、後：後期(1932～1941・1956)

● 建立団体：会・鎌倉町青年会、団・鎌倉町青年団、市・鎌倉市青年団、友・鎌倉友青会、同・鎌倉同人会

● 題額と新編鎌倉志との一致度：◎見出しと完全一致、○見出しと意味が一致、●見出しと不一致。新編鎌倉志文中に題額の記載あり  
△見出しと不一致。文中に題額の記載一部あり、×見出しと不一致。文中に記載なし

● 指導標碑文と新編鎌倉志掲載文との一致度：A：100.0%～75.1%、B：75.0%～50.1%、C：50.0%～25.1%、D：25.0%～0.1%、E：0%

● 新編鎌倉志引用状況：◇新編鎌倉志が吾妻鑑から引用、□新編鎌倉志が太平記から引用

※ 新編鎌倉志掲載の表記で記載（「東鑑」など）

（史料1）史蹟指導標

「北條執權舊蹟」  
往時此地ニ北條氏ノ小町亭在リ義時以後累代ノ  
執權概々皆之ニ住セリ彼ノ相模入道ガ朝暮ニ宴筵  
ヲ張リ時ニ田樂法師ニ對シ列坐ノ宗族巨室ト俱ニ  
直垂大口ヲ爭ヒ解ギテ纏頭ノ山ヲ築ケリト言フモ  
此ノ亭ナリ元弘三年新田義貞亂入ノ際灰燼ニ歸ス  
今ノ寶戒寺ハ建武二年利尊寺ガ高時一族ノ怨魂  
弔祭ノ爲北條氏ノ菩提寺東勝寺ヲ此ノ亭ノ故址ニ  
再興シ以テ其ノヲ改メシモノナリ  
大正七年三月建之 鎌倉町青年會

（史料2）史蹟指導標

「畠山重保邸址」  
畠山重保ハ重忠ノ長子ナルガ嘗テ北條時政  
ノ婿平賀朝雅ト忿争ス朝雅其ノ餘怨ヲ畜ヘ  
重保父子ヲ時政ニ讒ス時政モト重忠ガ頼朝  
ノ墓後其ノ遺言ニ依リ頼家ヲ保護スルヲ見  
テ之ヲ忌ミ事ニ依リテ之ヲ除カント欲ス乃  
チ實朝ノ命ヲ以テ兵ヲ遣シテ重保ノ邸ヲ圍  
ム重保奮闘ニ死ス時ニ元久二年六月二十  
二日此ノ地即チ其ノ邸址ナリ其ノ翌重忠亦  
偽リ誘ハレテ武藏國二俣川ニ關死ス  
大正十一年三月建 鎌倉町青年會

（史料3）史蹟指導標

「問注所舊蹟」  
元暦元年源頼朝幕府東西ノ廟ヲ以テ訴  
訟裁斷ノ所ト爲ス之ヲ問注所ト稱ス其  
ノ諸人群衆シ時ニ喧噪ニ涉ルコトアル  
ヲ厭ヒテ正治元年頼家之ヲ邸外ニ遷ス  
此ノ地即チ其ノ遺蹟ナリ  
大正六年三月建之 鎌倉町青年會

（史料4）史蹟指導標

「大江廣元邸址」  
大江氏奕世學匠トシテ顯ル嘗テ匡房兵法ヲ以  
テ義家ニ授ク廣元ハ其ノ匡房ノ曾孫ナリ頼朝  
ニ招カレテ鎌倉ニ來リ常ニ帷幄ニ侍シ機密ニ  
參畫ス幕制制定ノ功廣元ノ力與リテ多キニ居  
リ相模毛利莊ヲ食ム子孫依リテ毛利ヲトス  
而シテ因縁奇シクモ此ノ幕府創業ノ元勳ガ七  
百年後ノ末裔ハ王政復古ニ倡首タリ此ノ地即  
チ其ノ毛利ノ鼻祖大膳大夫ノ邸址ナリ  
大正十四年三月建 鎌倉町青年會

（史料5）史蹟指導標

「日蓮聖人辻説法之址」  
此邊ハ往時ニ於ケル屋敷町ト商家町ト  
ノ境ヲナス地點ニシテ幕府ニ近キコト  
トテ殷賑ヲ極メシ所ナリ建長五年五月  
日蓮聖人房州ヨリ鎌倉ニ來リ松葉ヶ谷  
ニ草庵ヲ結ビ日ニニ此邊ノ路傍ニ  
立チ弘通ノ爲民衆ニ對シ獅子吼ヲ續ク  
シ址ナリトテ世ニ辻説法ノ舊蹟ト傳ヘ  
ラル  
昭和十一年三月建 鎌倉町青年會

（史料6）史蹟指導標

「下馬」  
往昔鶴岡社參ノ武人ハ此ノ邊ニテ馬ヨリ下リ徒歩  
ニテ詣デタルニ因リ下馬ノ稱アリ今ニ地名トシテ  
存ス此ノ地點ハ鎌倉ノ要路ニ位セラルヲ以テ屢々戰  
場ノ巷トナリシコト古書ニ見ユ尚ホ文永八年（皇  
紀一九三一）九月十二日日蓮聖人名越ノ小菴ヨリ  
龍口ノ刑場ニ送ラレタマフ途上鶴岡ニ向ヒ八幡大  
菩薩神トシテ法門ノタメ靈驗ヲ顯ハシタマヘタル  
苦聲ニテ祈請アリシハ下馬橋附近ナリト傳ヘラル  
昭和十二年三月建 鎌倉町青年會

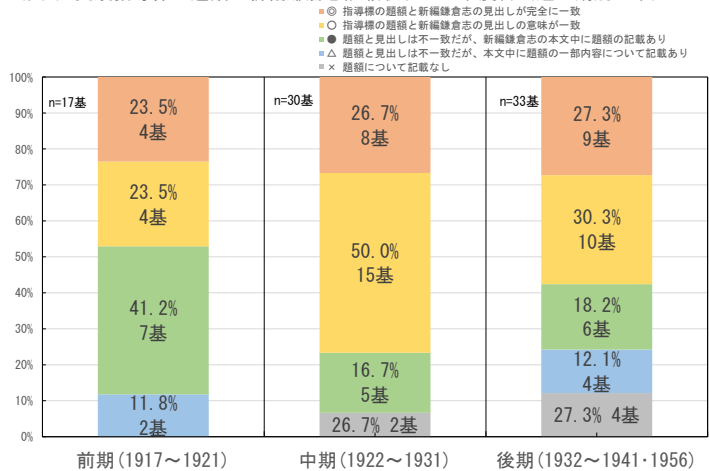
（史料7）史蹟指導標

「松谷寺及佐介文庫址」  
昭和五年金澤文庫傳存ニカカル佛書ノ奥  
書ヨリ發見サレ漸ク世ニ知ラルルニ至リ  
シ佐介文庫ハ松谷文庫又ハ佐介松谷文庫  
トモ稱ヘ金澤文庫ト同時代頃ノ創立ト推  
察セラルルモ其創立者所在位置規模存續  
期間等詳ナラズ然レ共北條氏ノ一族タル  
佐介氏其邸内ニ寺院ト文庫トヲ創建シ其  
地名ヲ寺ト文庫名トニ充テシモノナラ  
ン此地今ニ松ヶ枝又ハ松ヶ谷ノ傳唱アル  
ヲ以テ松谷寺及佐介文庫ハ共ニ此附近ニ  
所在セシモノト推定スル所以ナリ  
昭和十五年三月建 鎌倉町青年會

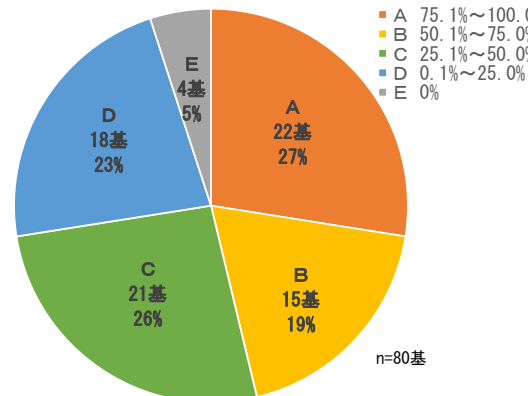
（図1）史蹟指導標「大藏幕府舊蹟」＊筆者撮影（2018年）



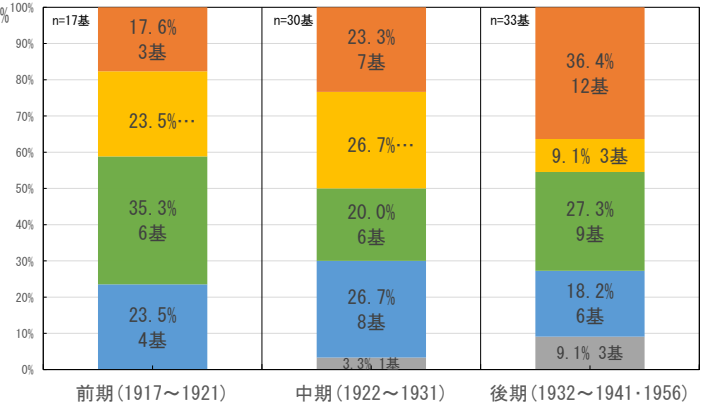
（図2）史蹟指導標の題額と新編鎌倉志記載状況の一致度合（造立期別比率）



（図3）史蹟指導標の碑文と新編鎌倉志記載内容の一致度合



（図4）史蹟指導標の碑文と新編鎌倉志記載内容の一致度合（造立期別比率）



(表2) 史蹟指導標碑文・新編鎌倉志記載文比較表

史蹟指導標										新編鎌倉志		
No.	題額・碑文				文字数(新編鎌倉志記載有無)			一致度 個別評価	見出し	収録巻	本文	
	計	有	無	比率								
9	北條執權邸舊蹟	題額	北條執權邸舊蹟	7	5	2	71.4%	○	寶戒寺 附北條屋敷 [略]	巻之七		
		碑文	往時此ノ地ニ北條氏ノ小町亭在リ	15	15	0			寶戒寺 附北條屋敷 [略]	巻之七	江間義時、大倉亭とあり。或は義時の亭、小町の上とあり。共に此地の事なり。此所、小町の上にて大倉の内なり。	
			義時以後果代ノ執權概ネ皆之ニ住セリ	17	17	0			寶戒寺 附北條屋敷 [略]	巻之七	時政は、後に名越の亭に居せられたり。其後代々の執權、相模入道に至るまで、爰に居す。	
			彼ノ相模入道ガ朝暮ニ宴筵ヲ張り時ニ田樂法師ニ對シ	24	4	20			寶戒寺 附北條屋敷 [略]	巻之七	相模入道崇鑑平高時	
			列坐ノ宗族巨室ト俱ニ直垂大口ヲ爭ヒ解キテ纏頭ノ山ヲ築ケリト言フモ此ノ亭ナリ	37	0	37						
			元弘三年	4	4	0			葛西谷 附東勝寺舊跡 彈琴松	巻之七	元弘三年五月二十二日と申に、	
			新田義貞亂入ノ際灰燼ニ歸ス	13	5	8			寶戒寺 附北條屋敷 [略]	巻之七	相模入道殿の、屋形近く火懸かりける。〈中略〉忽に灰燼と成とあるは、此地の事也。	
			今ノ寶戒寺ハ建武二年足利尊氏ガ高時一族ノ怨魂弔祭ノ爲	26	15	11			寶戒寺 附北條屋敷 [略]	巻之七	寶戒寺 〈中略〉 故に源尊氏、後醍醐天皇へ奏して、高時が爲に	
			北條氏ノ菩提寺東勝寺ヲ此ノ亭ノ故址ニ再興シ	21	21	0			寶戒寺 附北條屋敷 [略]	巻之七	葛西谷カサヤガヤツの東勝寺を遷して、北条の一族の骸骨を改め葬り。	
			以テ其ノ號ヲ改メシモノナリ	13	13	0			寶戒寺 附北條屋敷 [略]	巻之七	此寺を建立せり。	
大正七年三月建之 鎌倉町青年會				計	170	94	76	55.3%	B	50.1%～75.0%		
20	畠山重保邸址	題額	畠山重保邸址	6	6	0	100.0%	○	畠山重保石塔	巻之七	又此石塔の西方を畠山屋敷と云。是も重保が舊宅ならん。	
		碑文	畠山重保ハ重忠ノ長子ナルガ	13	12	1			畠山重保石塔	巻之七	畠山重保〈中略〉重忠は、重保と同日に、武藏國二俣川フタマガハにて誅せらるとあり。父子なり。	
			嘗テ北條時政ノ婿平賀朝雅ト忿争ス	16	0	16						
			朝雅其ノ餘怨ヲ蓄ヘ重保父子ヲ時政ニ讒ス	19	0	19						
			時政モト重忠ガ頼朝ノ薨後其ノ遺言ニ依リ頼家ヲ保護スルヲ見テ	29	0	29						
			之ヲ忌ミ事ニ依リテ之ヲ除カント欲ス	17	0	17						
			乃チ實朝ノ命ヲ以テ兵ヲ遣シテ重保ノ邸ヲ圍ム重保奮闘ニ死ス時元久二年六月二十二日	41	25	16			畠山重保石塔	巻之七	【東鑑】に、元久二年六月廿二日、軍兵由比濱に競走て、謀叛の輩畠山六郎重保を誅すとあり。	
			此ノ地即チ其ノ邸址ナリ	11	11	0			畠山重保石塔	巻之七	又此石塔の西方を畠山屋敷と云。是も重保が舊宅ならん。	
			其ノ翌重忠亦偽リ誘ハレテ武藏國二俣川ニ闘死ス	22	22	0			畠山重保石塔	巻之七	重忠は、重保と同日に、武藏國二俣川フタマガハにて誅せらるとあり。	
大正十一年三月建 鎌倉町青年會				計	168	70	98	41.7%	C	25.1%～50.0%		
4	問注所舊蹟	題額	問注所舊蹟	5	3	2	60.0%	●	裁許橋	巻之五	問注所を郭外に建らる。	
		碑文	元暦元年源頼朝幕府東西ノ庖ヲ以テ訴訟裁斷ノ所ト為ス	25	17	8			裁許橋	巻之五	頼朝の時、此所に屋敷有て訴訟を決斷す。〈中略〉是頼朝の時、營中と一所に就て、訴訟人を召決せらるゝの間、	
			之ヲ問注所ト稱ス	8	3	5			裁許橋	巻之五	問注所	
			其ノ諸人群集シ時ニ喧噪ニ渉ルコトアルヲ厭ヒテ	22	22	0			裁許橋	巻之五	諸人羣集して、鼓騒をなし、無大禮をあらはすの條、頗る狼藉の基たり。	
			正治元年頼家之ヲ邸外ニ遷ス	13	13	0			裁許橋	巻之五	【東鑑】に、正治元年四月一日、頼家將軍の時、問注所を郭外に建らる。	
			此ノ地即チ其ノ遺蹟ナリ	11	11	0			裁許橋	巻之五	問注所・政所の跡ならん歟。	
大正六年三月建之 鎌倉町青年會				計	79	66	13	83.5%	A	75.1%～100.0%		

【凡例1】：一致度評価：史蹟指導標題額の『新編鎌倉志』

◎：指導標の題額と新編鎌倉志の見出しが完全に一致

○：指導標の題額と新編鎌倉志の見出しの意味が一致

●：題額と見出しは不一致だが、新編鎌倉志の本文中に題額の記載あり

△：題額と見出しは不一致だが、本文中に題額の一部内容について記載あり

×：題額について記載なし

【凡例2】：史蹟指導標碑文と新編鎌倉志掲載文との一致度】

A：75.1%～100.0%

B：50.1%～75.0%

C：25.1%～50.0%

D：0.1%～25.0%

E：0.0%

【凡例3】

赤字：指導標の題額・碑文と新編鎌倉志の見出し・本文で言葉・言い回しが一致する文字

えんじ字：指導標の題額・碑文と新編鎌倉志の見出し・本文で意味・内容が一致する文字

【凡例4】

史蹟指導標碑文：筆者悉皆調査により作成

『新編鎌倉志』掲載文：大日本地誌大系刊行会編、日本歴史地理学会 校訂『大日本地誌大系 第5冊 新編鎌倉志 鎌倉撰勝考』大日本地誌大系刊行会、1915年より引用。

## About the influence of *Shinpen Kamakurashi* as seen in the inscription of Commemorative Historical Site Monuments (Shisekishidou-hyou)

Yoichi Kishimoto

This study focused on the stone structures called commemorative historical site monuments (Shisekishidou-hyou) in Kamakura City, Kanagawa Prefecture. The stone monuments were erected in sites closely related to historical figures and events in Kamakura. Each monument is engraved with a brief text on its surface explaining the monument's relevance.

The study found that the *Shinpen Kamakurashi*—a compendium of topographic, geographic, and demographic data concerning Kamakura compiled in the early modern period—strongly influenced the choice of the titles and contents in the inscriptions on the commemorative historical site monuments (Shisekishidou-hyou). The *Shinpen Kamakurashi* was compiled by the order of Tokugawa Mitsukuni, a feudal lord of the Mito Clan. Therefore, the author examined the 80 commemorative historical site monuments (Shisekishidou-hyou) in this study to determine whether the titles of these monuments are mentioned in the *Shinpen Kamakurashi*. The results showed that the titles of as many as 74 monuments are described in the *Shinpen Kamakurashi* in some form.

Comparing the contents of the commemorative historical site monuments (Shisekishidou-hyou) with the text, it was found that not all inscriptions were directly copied from the book. In fact, the contents of the inscriptions were influenced by the *Shinpen Kamakurashi* in less than half the monuments. A divergence was found in the degree of parallels between the inscriptions and the descriptions in the *Shinpen Kamakurashi*, as some of the inscriptions refer to only a small section from the book.

Therefore, the study reveals that although the *Shinpen Kamakurashi* greatly influenced the commemorative historical site monuments (Shisekishidou-hyou) in terms of the choice of the historical monuments implied by their titles, the inscriptions were composed by referring to other historical materials in addition to the *Shinpen Kamakurashi*.